
次世代育成を目指す仏教施設の役割・ネットワーク調査 ～インド仏教徒のルネッサンス～

独立行政法人 国際協力機構
榎木美樹

1. 研究課題

1-1. 研究の目的

インドにおける仏教への改宗は、近年、仏教徒運動のメッカたるナーグプル市（マハーラーシュトラ州）以南においても活発である。それを牽引するのがインド人のボディ・ダンマ僧侶（Bhadant Bodhi Dhamma）¹で、ボディ僧侶は2000年ごろからカルナータカ州およびアーンドラ・プラデーシュ州における改宗活動を重点的に行ってきた。南部インドにおける活動に勢いをつける出来事として、2003年のバンガロール（カルナータカ州の州都）における8万人の大規模集団改宗の挙行がある。

この大規模改宗と同じ年、カルナータカ州ビジャプル市に仏教思想に基づく青少年育成施設として禅塾（英語名：Bodhi Satva Dr.Babasaheb Ambedkar Bhikhu Academy, Indo-san Sogenji Zen Monastery）が設立された。主にカルナータカ州およびマハーラーシュトラ州の子弟が応募してくる由で、寄宿生活を通して学校教育を受けるとともに仏教教義や禅について学び、塾を卒業する時には僧侶になることが奨励される。

1956年の集団改宗挙行以降、インドにおける仏教徒運動は、当事者による仏教への改宗といった短期的かつ直接的な行動が注目されるが、一方で、改宗後の信仰維持や仏教徒の再生産のサイクルといった中・長期的な問題については不明な点が多い。本件調査は、次世代育成に取り組む青少年育成施設の実態とそこを利用する人々の動機や属性を調査することで、仏教的青少年育成施設としての禅塾の役割・意味・ネットワークを検証し、中・長期的な視点で活動するインド仏教徒の視座とそのコミュニティの実態に迫るものである。カルナータカ州ビジャプル市に立地する禅塾（英語名：Bodhi Satva Dr.Babasaheb Ambedkar Bhikhu Academy, Indo-san Sogenji Zen Monastery）を事例とし、仏教徒コミュニティおよび仏

¹ 1961年、インド共和国マハーラーシュトラ州ナーグプル市生まれ。インド社会では不可触民とされる階級の出身。生家は仏教徒であったが、政府へはヒンドゥー教徒（マハール）として登録していた。高校生になるまでは、自分の出自を自覚することはほとんどなかったが、高校時代の差別体験により、自分が不可触民であることを強く自覚し、カーストを超える存在として仏教徒となり出家した。その後、佐々井秀嶺僧侶の紹介により、ビハール州ブッダガヤにある印度山日本寺（仏教寺院としての宗教行為のほか、インドの宗教福祉法人として、無料保育施設や無料医療施設等の社会事業を展開する組織）で2年間修行。1986年（25歳）、臨済宗南禅寺派の富士玄峰僧侶の紹介により、岡山県の曹源寺（臨済宗妙心寺派）に入り、15年修行。1995年以降は、1年のうち2ヵ月はインドで活動する機会を設け、日本とインドの往復という生活をする。2000年（39歳）頃よりインドでの活動を本格化し、ナーグプル市以南を中心に活動している。

教への関心を示すコミュニティの実態を明らかにする。

1-2. 調査の方法 Research Methodology

本件調査では、この禅塾に通う子弟およびその親族への属性調査を実施し、禅塾に入塾する子弟の家庭環境、入塾理由、実家における周辺コミュニティとの関係などを塾生本人とその親族の視点から聞き取り、仏教的青少年育成施設としての禅塾の役割・意味・ネットワークを検証する。また、塾生およびその親族の了解が得られれば、塾生の実家を訪問し、それまでに収集した情報の確認をするとともに、地域社会との関係性を分析する。

1-3. 調査期間

- 2009年10月26日～11月4日 RINDAS 予備調査（ムンバイ 26日ービジャプル市 27～29日ーグルバルガ 29・30日ーアディラバード 30・1日ーナーグプル市 1～3日ームンバイ 4日）
- 2010年10月14～26日（ナーグプル 14～18日、カルナータカ州 19～26日。うちビジャプル市は 19～22日）
- 2010年11月4～7日（ハイデラバード 4日ービジャプル市他、塾生の自宅訪問 4～6日、7日ハイデラバード）

2. ナーグプル以南における改宗・決起集会

2-1. ボディ・ダンマ僧侶について：アンベードカル思想の継承と発展

ボディ僧侶は、マハーラーシュトラ州ナーグプル市の出身であり、母語はマラーティー語で、ヒンドゥー教では不可触民とされるマハール（Mahar）²をその出自とする。18歳で佐々井秀嶺僧侶（Bhadant Arya Nagarjuna Shurei Sasai）³の下で出家して以降、日本での修行期間以外はナーグプル市で佐々井僧侶とともに活動してきた。1994年ナーグプル市において、国際仏教青年会（International Buddhist Youth Organization. 以下 IBYO）を設立したのが、彼の独自活動の第1歩であった。以後、活動拠点を徐々にシフトさせ、現在ではナーグプル市以南全域を広く移動しながら活動している。

インド外の下層民衆コミュニティとの連携にも熱心で、海外に移住したパンジャープ州出身の不可触民コミュニティ（チャマール）をイギリスに訪問したり、それらの者がパンジャープ州に一時帰国する際に、当該集落に招かれて集会を開催したりもする。このチャ

² マハーラーシュトラ州で最大の不可触民カースト。マハールの伝統的職業は、死んだ家畜の処理、村役場の前・村の入り口などの清掃、地税支払いのための農民呼び出し、脱穀場の見張り、村・田畑などの境界線の記憶と訴訟における証言などであった。また、その多くは土地なし農民として農業にも従事した。ヒンドゥー教の観点から不浄視されるこれらの職業や習慣があり、中でも肉食、特に牛肉を食すマハールの習慣は不浄とされた。

³ 1935年8月30日、岡山県新見市菅生村別所生まれ。1955年（20歳）に高尾山薬王院（真言宗智山派）にて出家した。1966年（31歳）の時、タイへ留学し、1967年（33歳）にインドを訪れた。当初、ラージギルの日本山妙法寺にて修行するが、日本への帰国の前日、龍樹のお告げによりナーグプル市へ赴き、指導者を失い困惑していた仏教徒を宗教的・精神的に指導するようになった。1987年、インドに帰化し、現在は大菩提寺奪還運動（1992年から開始され、大菩提寺の管理権獲得のための断食・デモ行進など）に邁進中である。近年はマンサルにおける仏教遺跡発掘にも取り組んでいる。BJP 政権下、2002年には NMC (National Minority Commission: マイノリティ委員会)の委員に任命され、3年の任期を務めた。佐々井秀嶺の活動については[島 1995][白鳥 1995][山際 2000]に詳しい。

マール・コミュニティはまだ仏教徒ではないが、アンベードカル⁴に強い関心を示している。

ボディ僧侶は常に仏教僧の衣を着用しているが、教学や説話といった仏教関係の話よりはアンベードカルに関するエピソード、著作、演説内容に関する話に割く時間の方が圧倒的に多い。本件調査時でも、アンベードカルが下層民衆に対して付与したもの、それを現代の自分たちがどのように継承していくか、差別をどのように受け止め、いかに克服していくかという話が中心であった。ボディ僧侶の中ではアンベードカルの考え方、述べたこと、成したことの全てを理解し実践すると、それこそが仏教への理解であり実践であると考えている。「アンベードカル」を知ることが仏教を学ぶことであり、逆に仏教を学ぶことはアンベードカルを学ぶことであるため、アンベードカル理解を欠いた仏教というのはあり得ないという理解である。

アンベードカルの出自と人生は、州や言語を超えて、まだ不可触民としての生活を強要されている人々に対し、希望と活路を開くという信念がボディ僧侶にはある。ボディ僧侶が頻繁に使用する言葉として“our people”という言葉がある。これはマハールではないけれども、同じような思いをしている人びと、同じような生活を強要されている人びと、カースト・ヒンドゥーからひどい扱いを受けている人びと、といった多義的な意味を持つ。ボディ僧侶は、厳密にこの言葉の意味を定義することはしないが、参集した人びとが、それぞれの思いで解釈しながら、時に涙しながらボディ僧侶の話に耳を傾けていたことは印象的であった。ボディ僧侶はヒンディー語、マラーティー語、英語で話すが、必要に応じてキーパーソンたるコミュニティの有力者やその息子が現地の言葉に直して、通訳形式で集会を行う。

ボディ僧侶の活動は 2000 年ごろから南インドの中でもカルナータカ州およびアーンドラ・プラデーシュ州における改宗活動に力点を移し、現在の形式をとるようになった。特に 2003 年にはバンガロールで 8 万人規模の集団改宗を举行し、活動に勢いがついた。

2-2. ボディ・ダンマ僧侶による決起集会の流れとパターン

ボディ僧侶は下層民衆の集落を訪問し、仏教への改宗式を举行することに加え、改宗前後の集会やイベントを企画・実施する。OBC やムスリムが隣接する村に居住しているケースもあるが、いずれもホラヤ（Holaya）あるいはマハールと呼ばれる人々が大半を占める。アーンドラ・プラデーシュ州の一部地域には、元ナクサライト（共産主義ゲリラ）の活動家もいる。

手法としては、アンベードカル思想を解説・強調しつつ仏教について演説し、時にはデモ行進やシュプレヒコールを用いて、仏教徒の存在をコミュニティ内外にアピールする。

⁴ Bhimrao Ramji Ambedkar (1891–1956) . コンカン地方の不可触民マハールとして生まれた（14 人兄弟の末子）。不可触民として当時異例の教育を受け、アメリカ、イギリス、ドイツ等への留学の後、1922 年に弁護士の資格を取得した。1924 年ごろから弁護士として不可触民問題に取り組むと同時に、政界に進出し 1930–40 年代には不可触民解放運動の指導者として、MS 州を中心に活動を展開した。1942 年に労働大臣、1947 年に法務大臣として入閣し、憲法起草委員会委員長として 1949 年にインド共和国憲法を發布した。1956 年 10 月 14 日、ナーグプル市において仏教への集団改宗を举行し、同年 12 月 6 日に病没した。いわゆる「新仏教徒」からは父とも菩薩とも尊敬される。「不可触民解放の父」と呼ばれることもあり、近年は、仏教徒に限らず指定カーストからの尊敬も集める。

挨拶語（Jai Bhim⁵）、白い装束の着用を奨励し、共通のスローガンやキャッチ・フレーズを使用する。

各式典・集会は、ボディ僧侶の移動時間に合わせて 1 日のうちいつでも行われる。各式典・集会ごとの若干の相違と特徴はあるものの、共通して一定の流れとパターンがある。開始から終了までおおよそ 90～120 分程度で、住民の出迎えに始まり、住民の見送りで終わる。決起集会の流れとパターンを時系列で示すと以下のようになる。

- IBYO（国際仏教青年会）のメンバーが、一行を宿泊所もしくは幹線道路まで迎えに来る
- 会場到着
- 青年会や地域有力者との打ち合わせ
- ボディ僧侶を含め、ゲストは会場前方に設置されている椅子に着席。聴衆はゴザ・布・椅子などに座る（聴衆とは対峙するような位置関係）
- 会場前方に安置されているブッダとアンベードカル⁵の像・絵画に献灯・献花・献香
- 三帰依文などの仏教経典を全員で唱和（おおよそパーリ語）
- ボディ僧侶がゲスト来訪の目的を紹介
- ゲストによるスピーチ
- ボディ僧侶スピーチ
- ボディ僧侶は布施を受ける
- 記念撮影
- 横断幕や仏旗などを持って、仏教徒宅・寺・集会所などへ移動（一種のデモ行進状態になる）
- 仏教徒宅・寺・集会所で施食を受ける
- 集会関係者への挨拶
- 退出（次の会場へ移動）



写真1：会場まで先導するバイク隊 写真2：町中での集会後の様子 写真3：仏教徒宅での会議の様子

⁵ ビームラーオ・アンベードカル（Bhimrao R. Ambedkar）の名前からきており、原意は「ビームに勝利あれ」だが、「アンベードカル万歳」といった意味あいで使用される。広くインドで交わされる挨拶語「ナマステ」のように、他者と対面した際、別れの際などに使用される。より丁寧な挨拶の場合は、「ナマステ」の時と同様、両手を合わせて「ジャイ・ビーム」と言う。

2-3. 改宗母体

これまで、ヒンドゥー教から仏教への集団改宗は、マハーラーシュトラ州における最大の不可触民階級であるマハール (Mahar) を母体とすると考えられてきた。マハールの 75% は仏教徒であるともいわれる [Zelliot, 1998: 127]。1956 年以降の集団改宗も、マハーラーシュトラ州を中心に実施されてきた。佐々井秀嶺僧侶 (Bhadant Arya Nagarjuna Shurei Sasai) の改宗活動は、マハーラーシュトラ州、マッディヤ・プラデーシュ州、チャッティスガル州で行われ、いずれもマハール・コミュニティを中心に実施されてきた。したがって、仏教への集団改宗は、マラーティー語もしくはヒンディー語圏のマハール・コミュニティでのみ活発であると考えられてきた。併せて一般に、1956 年における仏教への集団改宗によって生じた仏教徒の 90% がマハールからの改宗者だともいわれているため、仏教徒＝マハールという固定観念は根強い。佐々井僧侶の拠点であるナーグプル市周辺では、マラーティー語で「バウッダ (Buddha)」の意味は「マハール」であるとさえされている。

本論文 2-2 において、調査地のいずれもが元不可触民集落であることは述べた。このとき聞き取ったカースト名称や伝統的職業に鑑みるに、ホラヤ (Holaya) とマハールは同じ不可触民というカテゴリではあるが、州も異なるため別個の集団であると考えられた。しかし、興味深い記述があった。古い著作かつボンベイを中心に述べられたものであるため同一であるとみなすには注意が必要であるが、エントーベンによれば、ホラヤはマハールの下位区分だとあり、服装や装飾品はマハールと酷似しているとある [Enthoven 2008(1922): 74-75]。また、「大地の子」(*Bhumiputra; son of the soil*) と称されるマハール同様、マイソール (カルナータカ州) ではホラヤも「大地の子」と称される [Ibid.: 75]。さらに、ホラヤはマラーティー語圏のマハール居住地域およびグジャラートなどに分布し、死肉を食す。牛を食し酒類を飲むことも [Ibid.: 80-81]、マハールと同様である。職業に関し、死んだ動物の移動・処理、靴製造、農繁期の農作業、村の境界の清掃、村の境界や池の見張り番、隣接する村間のメッセンジャーなどがホラヤの伝統的な生業で [Ibid.: 80]、マハールとほぼ同様の役割を担っている。

調査地においては、ホラヤがマハールの下位区分だとの言説に触れることはなかったが、ボディ僧侶がホラヤ集落に入っていくことができた理由のひとつに、言語・習慣・差別体験等のマハールとの類似性があったことは確かであり、この意味するところがマハールの下位区分としてのホラヤであるならば、ホラヤ集落へのアクセスの容易性は、こうした出自の親和性に強く依存したものとなる。

調査地で出会ったホラヤがマハールの下位集団として位置づけられるなら、その意味において、仏教徒運動は、広い意味でのマハール・コミュニティ内部での動きとなる。しかし、少なくとも今回聞き取った限り、ホラヤ民衆は自身をマハールの傍系だと自称するようなことはなかった。エントーベンの記述はさておき、他者から見て同一/類似であったとしても、当事者が違うと意識しているのであれば、それを尊重する必要があるだろう。今後の調査でさらに明らかにしていく。

2-4. 担い手としての青年層

ボディ僧侶は少なくとも 90 年代後半からすでに青少年育成に熱心であった。若者の方が、伝統や規則に無条件に従うことをせず、正当性を見出せば変更や廃止に対して果敢に挑戦

していこうとする意志が強いからであろう。それなりに人生の経験を重ねた世代の価値観を変えることは容易でないことをボディ僧侶は強く意識していた。日本における修行を一旦終えて帰国したボディ僧侶がナグプル市で活動する際に最初に組織したのは、サンガ（僧伽）ではなく **IBYO** という在家の青年グループであった。

今回訪れた全ての場所において、地域の仏教青年会もしくは地域の青年・壮年有力者が主導して式典を開催し、送迎や食事の世話、行政への申請手続き等、全ての過程を取り仕切っていた。ロコミなどで広がった **VCD** や **DVD** に収録されたボディ僧侶の活動記録を観たり人づてに聞いたりして、ボディ僧侶にコンタクトを取る場合が多いとのことだ。現在、ボディ僧侶はこういった人物をキーパーソンとして、そのコミュニティに招き入れられ、式典や集会を開催する。訪問が1度きりということはほとんどなく、複数回足を運ぶ中で、熱心にかつ誠実に働く **20~40** 代の青年・壮年のダリット俗人男性に仏教青年会を組織させ、次回のボディ僧侶の訪問までに達成目標を与える。たとえば、次回は何月何日に来るので、それまでに村全戸の家の中のヒンドゥー教神像を一カ所に集めておくように、といった具合である。

上述した仏教青年会および下記に述べる禅塾に共通するのは、アンベードカルについて学び、仏教的視座を持つ地域のリーダーとなる人材を育成しようとする試みだという点である。



（左から）

写真4：アンベードカル像前での礼拝

写真5：僧侶を先達としてアンベードカル像に供養

写真6：アンベードカル像前での集会

3. 禅塾

3-1. 禅塾の運営

ボディ僧侶は仏教を修行するために、インドでの師である佐々井僧侶によって、岡山県の曹源寺（臨済宗）の原田正道僧侶の下に送られた⁶。その影響で、臨済禅の修行で培った

⁶ 曹源寺は、岡山県岡山市郊外（中区円山）に位置する臨済宗妙心寺派の禅寺である。通常、住職の原田正道僧侶を除き、他は全て海外より来日した修行僧であるため「外国人の寺」としても知られる。

瞑想や仏教学を実践する場としてこの禅塾がある。カルナータカ州ビジャプルに 2003 年に設立された禅塾（英語名：Bodhi Satva Dr.Babasaheb Ambedkar Bhikhu Academy, Indo-san Sogenji Zen Monastery）には、11 歳以上の男子なら志願すれば、無条件で入塾できる⁷。ボディ僧侶を支援する日本からの寄付金によって建設された⁸。主にカルナータカ州およびマハーラーシュトラ州の子弟が応募してくる由である。寄宿生活を通して仏教教義や禅について学び、塾を卒業する時には僧侶になることが奨励される。

塾内では僧衣を着用して朝夕に勤行を行うが、日中はシャツにトラウザーといった一般的な服装で地元の公立学校へ通って勉強する。食事の準備、掃除などは当番を決めて行う。塾を不在にすることの多いボディ・ダンマ僧侶に代わって、以前は塾生であったボディ・プラッギヤ僧侶（Rev. Bodhi Prajna. 26 歳）が現在の塾全般の運営管理を行っている。時折、仏教徒や仏教に強い興味を持つ人が、冠婚葬祭や家庭における儀式を依頼しに来る。依頼者の仏教に対する理解度に応じて、ボディ僧侶や、ボディ・プラッギヤ僧侶が対応する。

2009 年 10 月に筆者が初めて禅塾を訪問した際の塾生の年齢構成は、10 歳 1 人、11 歳 0 人、12 歳 2 人、13 歳 4 人、14 歳 5 人、15 歳 4 人であった（1 人は不明）。これら塾生 17 人およびボディ・ダンマ僧侶、ボディ・プラッギヤ僧侶から聞き取った内容は次のとおりである。

- 塾生の募集は、新聞に公告を出す。応募資格として、SC（指定カースト）もしくは ST（指定部族）であること、11 歳以上、男子、禅塾卒業時には僧侶になることなどを記載する。書類審査後、面接をする。
- 応募条件を満たし、本人と親の希望があれば、ほぼ無条件で受け入れる。
- 毎年、60 人程度が応募してくるが、大半は途中でやめていく。
- これらの少年の中から、1 人でも僧侶が輩出できればと思う。
- 親は、禅塾を無料のホステルのような存在と考えているようだ。
- 本来はそのようなことでは困るが、実際に生活する少年が学校教育を受け、仏教を学ぶことで、僧侶になるあるいは別の形で社会の役に立とうと考えるようになればそれでいい。
- そういった場を提供することが、禅塾の最大の意義である。
- 塾生のうち 7/17 人は将来、僧侶になりたいと思っている。
- 塾生のうち 4/17 人は将来、学校教員になりたいと思っている。

⁷ 現在は男子のみ受け入れている。これは男性指導者が男子生徒を指導し、女性指導者が女子を教育するという価値観に依っている。指導にあたる人材の確保を前提として、将来的には女子も受け入れていきたい由とのこと。

⁸ 岡山県の曹源寺や錬心館道場にかかわる人々による寄付等で運営されている。



写真 7：禅塾外観



写真 8：塾生たち（2009 年 10 月）



写真 9：禅塾内（ブッダとアンベードカルが貼ってある）

3-2. 禅塾における生活

禅塾は、原則的に仏教僧侶育成機関である。10 代の青少年を対象として、見習い僧としての共同生活を通して、学校教育と仏教教育を享受できる施設としての機能を有している。但し、塾生の全員に僧侶になることを強要するのではなく、現段階では入塾者の中から一人でも多く、将来僧侶になる者がいればよい、僧侶にならなくても実際に生活する青少年が学校教育を受け、仏教を学ぶことを通して、将来、別の形で社会の役に立つようになればよいとボディ僧侶は考えている。この意味で、仏教僧を養成することが必ずしも重要な

のではなく、仏教的視野で物事を観ることのできる人間を育成することに主眼が置かれている。

ただこの場合、仏教といっても、日本の臨済宗で用いられる經典類、言語使用、価値観、時間観念の枠組みで運営されている。食事の際も、禅寺での食事作法に則り、私語は許されず、決まった形式で秩序正しく飲食行為がなされる。時間や物の配置に関しておおらかなインドにあつて、禅塾で実践されていることは規格・規程どおりである。禅宗に関する知識と情報を多少なりとも持った者なら、規律正しい禅の精神がここ禅塾で実践されていることを目撃するだろう。

禅塾運営の資金源が日本の寺院（臨済宗の曹源寺）を取り巻く人々およびその寺院が開催する座禅会（＝菩提心を発こそう会）への出席者の寄付金であることに鑑みると、禅宗的教育を推進するのも納得がいく。

【Time Table】 Indosan Sogenji Zen Monastery, India

Morning	4:40	Wake up Bell
	5:00 - 5:30	Chanting (Pali & Japanese) Kinhin
	5:30 - 6:30	Zazen (Meditation) Han
	6:00	Sanzen
	6:30 - 7:00	Kinhin (Walking Meditation)
	7:00 - 7:30	Shukuza (Breakfast)
	7:30 - 8:30	Soji (Cleaning, outside and inside)
	9:00 - 11:30	Zazen
	10:00	Sanzen
	11:30 - 12:00	Kinhin (Walking Meditation)
Afternoon	12:00 - 12:30	Saiza (Lunch)
	After Lunch 1:50	Rest
	2:00 - 3:30	Teiso (Dhamma Discourse)
	3:30 - 4:00	Nebenorai (Toilet)
	4:00 - 4:30	Sarei (Tea Time)
	4:30 - 5:30	Zazen
	5:30 - 6:00	Kinhin (Walking Meditation)
Evening	6:00 - 6:30	Yakuseki (Dinner)
	6:30 - 6:50	Nebenorai (Bathroom)
	7:00 - 7:30	Kinhin (Walking Meditation)
	7:30 - 8:30	(Discourse on Meditation)
Night	8:30 - 9:00	Chanting (Pali and Japanese)
	9:00 - 9:30	Yaza (Night Sitting)
	9:30 - 10:00	Toilet and Rest
	10:00	Light off



写真 10: 塾生 (2010 年 11 月現在)



写真 11: 食後の勉強風景

INDOSAN SOGENJI ZEN MONASTERY

Osesshin sutra chanting

- ✓ 1. Hannya Shingyo(English)般若心経 (prajnaparamita Hrdaya sutra)
- ✓ 2. TeiDai Denpo Busso no Myo Go(Dhamma transmission lineage)蓮代伝法佛相の名号
- ✓ 3. Hannya Shingyo 般若心経 The Heart Sutra of Perfect wisdom
Honzon Eko 本尊回向
4. Daihishu 大悲しゅ
Soshi Eko,Kaisan Eko 相師通回向, 開山通回向
5. Hakuin Zenji Zazen Wasan 白隠禅師座禪和讃
Zaiki Eko 在家回向
6. Enmei Jikku kannon gyo(33Times)延命十句観音経
7. Shuku Sei Gan 四弘誓願文
The Bodhisattva vows (English)

Pali sutras パリー語経

1. Trisaran 三帰戒
2. Panchsheel 五戒
3. Buddha,Dhamma,Sangha vandana 三宝経

Meal Sutras 食事経

1. Ten Buddha name (Jyuu butsu myou) 十仏名
2. Five reflections (Go kan mon) 五観文

Discourse Sutras 提問経

1. Daihishu(3 Times)大悲しゅ
2. kai kyou Ge 開経げ

前述した 2009 年の訪問時には 17 名いた塾生が、約 1 年が経過した 2010 年の本件調査時には 8 名になっていた。通常は、新聞広告を用いて 6 月頃に入塾生を募る。今期は、入塾受付時期にボディ師は日本に行っていて不在、留守預かりの B.Pragnya 師は大学の試験を受けに他所に行っていたため、受け入れ体制が十分でなかった（通常は、60 名くらい受け入れ、最初の 1 ヶ月ほどで自主的に退塾していく子弟がいるため、新規入塾から 3 ヶ月ほどの間で 20 名ほどになる由）。今期入塾当初は 20 人ほどいた塾生も、4 カ月目を迎える 10 月には 8 名となっていた。

少人数ということを手にとり、本件調査では全員の塾生に家庭訪問を実施した。禅塾の立地するビジャプル市から車両で日帰りできる距離に実家がある者が 7 名（2 名はビジャプル市から 15km、1 名は 30km、3 名は 60km、1 名は 160km）、1 名は日帰り不可能であった（ビジャプル市から 300km）。8 名全員の出自はホラヤ（Holaya）、母語はカンナダ語であるが、初歩的なヒンディー語は理解できる。かつて英語を教えるために外国人が禅塾に滞在したこともあり、初歩的な英語も使用できる。各塾生への自宅訪問の前後には、ほぼ必ず地域の仏教徒集会が開催された。ボディ僧侶もしくはボディ・ブラッギヤ僧侶が、ゲスト（つまり筆者）と塾生を伴って地域を訪問する旨連絡を取るため、地域有力者もしくは青年仏教会が集会をアレンジしていた。集会開催の主な流れは、本稿 2-2.において示したとおりである。

3-3. 塾生の家庭訪問

No.1&2 Karna Bodhi および Bodhi Daya の家

場所：Ukumanal Shed（禅塾から南東 10km）

特記：2006 年、以前居住していた村が洪水で沈んだため、Gram Panchayat が割り当てた場所の仮設住宅（アルミトタンの壁と屋根、100 世帯）に移転した。SC、OBC、ムスリムがレーンに分けて混在する。2km 先に新しい村を建設中。一家庭あたり 2.5×2.5m の土間の空間に居住（台所込み、薪使用）する。この兄弟の家は、父（49 歳）母（30 歳）弟（6 歳）妹（4 歳）が同居。母方の祖父母の家も同じコミュニティ内にある。入塾のきっかけ：家においておくと父親に暴力を振るわれる。この地域からではほとんど学校へ行かない。

（Rs.:インドの通貨ルピー）

家族	年齢	職業	備考
父	49	タクシー運転手	酒飲みで家族に暴力を振るう Rs.120/日
母	30	主婦・日雇い労働	夫とは親戚関係。Rs.100/日
K.B	13	7 年生・塾生	将来は医者になりたい
B.D	11	4 年生・塾生	将来は警察官になりたい
弟	6	未就学	母は禅塾に入塾させたいが、父は反対
妹	4	未就学	———

No.3 Dhamma Kirti の家

場所：Gulbarga 県 Valamgi 村（ビジャプル市から北東 160km）

特記：父が 2010 年 6 月からドバイに出稼ぎ。村の中で多くの家庭がドバイ出稼ぎ経験（出稼ぎのお金で家を建てる）。

入塾のきっかけ：母の兄である地元有力者で地元パンチャヤト・メンバーのアンバライ氏の紹介。

家族	年齢	職業	備考
父	30	ドバイで就業	職種は不明（少なくとも妻や近所の人は認識していない）ドゥバイで出稼ぎ中 Rs.2000Rs/月、銀行送金あり。
母	26	主婦	地元有力者 Ambarai さんの妹
D.K.	11	5 年生・塾生	将来は学校教員になりたい
妹	1	未就学	———

No.4 Vinaya Bodhi の家

場所：Sindagi（ビジャプル市内から東北東 60km）の Jai Bhim Nagar・・・仏教徒は 70/200 世帯

特記：家庭内に TV あり、携帯あり、電気あり、冷蔵庫なし。Ashray Yojna（指定カーストへの Government Scheme）で家を建てた。

入塾のきっかけ:父の弟＝ココナッツのビジネスマンが V.B.を禅塾に連れて行った。Banteji の運転手の Mundappa 氏が禅塾を紹介。叔父が施設を見学しに来て決めた。

家族	年齢	職業	備考
父	38	水運び	10 年前、アンベードカルを知って仏教徒になった。 プラスチックポット 6 つをバイクで運んで一回 Rs.15. 朝 5 時から夕方 6 時まで。何回運んでいるかはわからない。
母	32	市役所の清掃	結婚後、仏教徒になった。Rs.4000/月
姉	15	10 年生	学部修了まで行きたい。医者か教員になりたい
V.B.	13	8 年生・塾生	将来は Dalit Nayakar (ダリットリーダー) になりたい
妹	11	6 年生	女子の入学が許可されれば禅塾に入塾するかもしれない
弟	8	2 年生	——

No.5 Prashant Bodhi の家

場所: Sindagi (ビジャプル市内から東北東 60km) の Jai Bhim Nagar・・・仏教徒は 70/200 世帯

特記: 仏教徒ではないが、アンベードカルを知っている。家庭内に TV あり、冷蔵庫なし、電気なし。Prashant Bodhi の祖母の家 (実家は Shalpur。父の死後、祖母の家へ移ってきた。現在は祖父が Shalpur で一人暮らし)。この家は、レンタル。

入塾のきっかけ: V.B.父の弟 (=祖父の弟の息子) =ココナッツのビジネスマンが Psht.B.を禅塾に連れて行った。

家族	年齢	職業	備考
父	—	—	死亡
祖母	50—55	市役所の清掃	
母	37	市役所の清掃	農業 Rs.1600/月、日曜休日 (Rs.40/日×25 日+寡婦年金 Rs.400/月) ←Rs.200 差額あり 結婚後、仏教徒になった。息子に僧侶になってほしくない
姉	18	ホステルの料理人	結婚したが、夫が出て行く
姉	16	既婚	夫の場所 (30km の距離) で暮らす
Psht.B.	13	8 年生・塾生	将来はエンジニアになりたい。村の 60 家族のうち 25 家族が仏教徒。彼らが仏教寺院を建設した。彼らが自分に敬意を表してくれる。
弟	11	6 年生	2 度禅塾に入れるが、戻って来た

No.6&7 Dhamma Raja および Dhamma Gosh の家

場所: Kadani 到着 (Sindgi から 5km: ビジャプル市内から東北東 65km)・・・仏教徒は 40 世帯

特記: 仏教徒ではないが、アンベードカルは知っている (生誕祭などで)。家庭内に TV な

し。

入塾のきっかけ：母の姉が **Bijapur** 在住で、「いい学校がある」と紹介→母が禅塾に入れる
決断

家族	年齢	職業	備考
父	35	クーリー（荷物運び）	20 代前半にムンバイで出稼ぎ→家を建てた Rs.150/日、日曜休日
母	32	クーリー	Rs.80/日、休日なし 姉が Bijapur 在住で、「いい学校がある」と紹介→ 学校という認識なので、僧侶にはなってほしくない
D.Raja	13	7 年生・塾生	将来は僧侶になりたい
D.Gosh	11	5 年生・塾生	将来はリーダーになりたい
妹	9	3 年生	—

No.8 Prasanna Bodhi の家

場所：Berula 村（ビダル市内から 15km：ビジャプル市から 300km）・・・40～50 世帯（2～3
世帯を除き、コミュニティは仏教徒）

特記：幹線道路から一番近い、村の入り口に家がある。家庭内に電気、TV、携帯電話、冷
蔵庫なし。母は「仏教徒ではない」と言うが、日々の信仰形態を聴取すると、ヒンド
ウの神々ではなくアンベードカルとブッダを祀っているため、仏教徒だと判明。書
類上は「SC」（指定カースト）＝ヒンドゥーと登録。

入塾のきっかけ：夫の死から 1 年後、**Bijapur** 在住の母の友人が禅塾を紹介（かつて自分の
息子を入れていた）

家族	年齢	職業	備考
父	—	—	2005 年死亡（体が痛いと言い出し、突然死んだ）
祖母	75 ↑	無職	—
母	35	クーリー	クーリーは季節労働（6～8 月） 禅塾をはじめは学校だと思っていた。 Psn.B には僧侶でなく、稼ぎ手になってほしい (市の清掃業務 Rs.4000/月もある可能性あり)
Psnna.B.	14	9 年生・僧侶	将来はエンジニアになりたい
弟	8	3 年生	—

塾生の最少年齢は 11 歳、最長年齢は 14 歳で、出身コミュニティは既に仏教徒であるこ
ともあれば、ヒンドゥーのままのこともあるが、すべての塾生の実家でアンベードカルを敬
っている。したがって、コミュニティ全体が仏教徒という村の出身者もいれば、近隣に OBC
やムスリム、カースト・ヒンドゥーと混在している村の出身者もいた。

アンベードカルについては1名（入塾当初10歳の最年少）を除く全員が禅塾に来る前から知っていた。ブッダや仏教に関しては全員が禅塾に来るまで知らなかったと応えた。

いずれの実家も、コミュニティ内では貧しく、扇風機・TV・冷蔵庫といった電化製品はほとんどない家庭だった。携帯電話も、働き手の男を含め、誰も所有していない。子弟を禅塾に入れなければ義務教育を受けさせるのも困難な家庭であった。

3-4. 考察

塾生の家庭訪問を実施した率直な感想は、彼らの出身家族は経済的な困窮家庭だということだ。コミュニティの他の過程に比較して、家も簡素で、モノが極端に少ない。我々の訪問に興奮したコミュニティ成員が携帯のカメラで写真や動画を撮る光景が比較的多かったが、塾生の家庭には携帯電話がなく、そもそも電気が通っていない場合が多かった。8名のうち2組は兄弟であるため、実質的には6家庭であるが、2家庭は父親が最近5年以内に死亡した純粋な母子家庭、別の2家庭は父親が生存はしているもののある種の「不在」家庭（1家庭は酒ばかりのみ家族に暴力を振るって迷惑をかける父親であり、もう1家庭は出稼ぎ労働者で不在）であり、残る2家庭のみが父親が生活費を入れ、一家の大黒柱として機能している。しかし健全な父親のいる2家庭でさえも不安定な日雇い労働者である。ちなみに、ホラヤの伝統的職業に就いている者は、今回の調査ではいなかった。

そのようなコミュニティにおける脆弱家庭ではあるものの、親戚や友人・知人にコミュニティの有力者がおり、その人を介して禅塾という存在を知り、子どもの教育のために数十キロから数百キロ離れたビジャプルまで子どもを送っている。禅塾は塾生募集に際して新聞広告などをするが、この8名に関しては、全員ロコミであった。

禅塾がなかりせば、義務教育といえども受けられない家庭の子弟である。したがって親は、子どもと物理的に離れることの別離の悲しさはあるものの、それを我慢すれば、無料で12年生までの教育を受けさせることができ、食事をさせることができる。出身コミュニティにおいて12年生というのは学歴として非常に高く、公務員やエンジニア、医者といった社会的地位と経済的に安定する職種につくための最低限の学歴を保証することができる。

筆者は全員の保護者に、息子が僧侶になることを望むか質したが、今回家庭訪問した8名の親のいずれも、将来僧侶になってほしいとは応えなかった。返答の言葉を濁す場合もあったが、家計を支えるために学歴をつけ就業して欲しいと明確に述べる者もいた。これに対し、筆者は日本やチベット社会の例を引いて、僧侶でも教員、医者、弁護士、社会活動家などになっている者はいることを示したが、僧侶が俗人の仕事をも兼務することについては理解できないようであった。僧侶（という仕事）か一般の就業かの二者択一式の思考をしていた。仏教僧に関しては、生産活動に携わらない宗教活動をする人間と捉えているようである。

親の多くは禅塾を「寄宿学校」と認識しており、宗教施設とは知らない者もいた。したがって、自分の息子の剃髪した僧衣姿を初めて見たという者もいた。びっくりしたけれど、ちゃんと教育を受けられるのであれば何も言わないと述べたことも印象深かった。塾生本人たちも、僧侶になることを希望するのは2010年11月の調査時点で1名のみで、残りはエンジニアや教員などの職に就くことを希望した。

上記のように、禅塾はその理念において「アンベードカルについて学び、仏教的視座を

持つ地域のリーダーとなる人材を育成しようとする試み」であるが、その実において現時点では困窮家庭のセーフティネットとしての性格が強いことがわかる。

4. 結論と課題

4-1. 得られた成果

禅塾は、原則的に仏教僧侶育成機関である。10代の青少年を対象として、見習い僧としての共同生活を通して、学校教育と仏教教育を享受できる施設としての機能を有している。それを踏まえたうえで、禅生およびその親族への属性を調べ、禅塾に入塾する子弟の家庭環境、入塾理由、実家における周辺コミュニティとの関係などを塾生本人とその親族の視点から聞き取り、仏教的青少年育成施設としての禅塾の役割・ネットワークを検証することが本稿の目指すところであった。

得られた成果として、禅塾は南インドにおけるボディ・ダンマ僧侶の活動拠点となっており、アンベードカルや仏教をまだよく知らない人々をエンパワーするスポットになっていることが判明した。また禅塾は教育施設であることから、経済的支援・人的支援を目的として外国人や地元以外の人々を引き寄せてもいる。この意味でインドと日本をつなぐ結びの役目も果たしている。また、現時点における禅塾の主要な役割として、切実な経済問題を抱える脆弱家庭に対するセーフティネットとしての機能も重要である。

これら脆弱家庭には、当該コミュニティの有力者が親戚・友人・知人としてコンタクトを取れる距離にあり、禅塾を紹介されている。その地域有力者が禅塾の存在を知る契機は、ボディ・ダンマ僧侶の活動を知ったことに始まっている。彼らの多くは2003年のバンガロールにおける8万人の改宗式の前後に撮影されたVCD/DVDによってボディ僧侶の存在を知るに至っている。その2003年の改宗式は、1990年代後半からのボディ僧侶による南インド3州における地道な啓蒙活動が結実したものである。禅塾が設立されたのも2003年である。

初期の塾生であったボディ・プラッギヤ僧侶が今や塾の運営側に携わり、カルナータカ州内における仏教徒の活動を先導するなど、徐々にではあるが、確実に人材が育ちつつある。ボディ・プラッギヤ僧侶も、当時60名ほどいた塾生の中の1人であった。僧侶になり、社会活動を担うまでに成長した。また、地域の有力者とまではいかないが、仏教青年会の中核メンバーを務める者は還俗したかつての塾生であったりする。

この意味において、禅塾は、仏式の儀礼を執り行いたい地元の仏教徒コミュニティもしくは仏教に強い関心を寄せるコミュニティの需要を満たし、かつ経済的に困窮する家庭の子弟を受け入れて教育・経済支援をするとともに、外国人を含めた外部者とのプラットフォームを提供する施設として機能している。

ビジャプルの位置するカルナータカ州をはじめ南インドでは、近年とみに幹線道路沿いにそびえ立つアンベードカル像をいたるところで目にするようになった。アンベードカルを信奉する被抑圧者層が多いのであろうことが見て取れる。ボディ・ダンマ僧侶の開催する集会や式典における布施にお札が混じるようになり、結構な数の出席者が携帯電話を所有している現状を見るにつけ、彼らの相対的な経済状態の向上を肌で感じるが多くなった。しかし、今回の調査で判明したように、個別に見れば、電気・水道、清潔なし尿処理施設がなく、政府からの支援もほとんど受けられていない層がいることもよくわかった。

仏教を取り巻く社会状況の中に、経済的貧困は重要なファクターとして存在していることを、この一連の調査を通じて確認できた。

4-2. 今後の課題

何度も述べたように、塾生のネットワーク周辺には、当該コミュニティの有力者が親戚・友人・知人として配置されている。親戚や知人に有力者がいること自体、そのコミュニティ内においては本来影響力を持つはずの家庭なのかもしれない。たとえば、父親が健在であれば等のいくつかの条件が整えば、彼らは脆弱家庭ではなかったのかもしれない。あるいは、ホラヤはその内部に 6 層のサブカースト持つと聞いた（ちなみにマハールはその内に 12 と 1/2 のサブカーストを有する）。今回の調査ではこの詳細について確認が取れていないが、ホラヤ内におけるヒエラルキーが塾生となる際のフィルターの役割をしている可能性も否定できない。同一コミュニティ内におけるパワーバランスについては、今後の調査でつきとめてみたい。

今回の調査は、ビジャプル市の禅塾という極めて末端で起きている現象を明らかにするためのものであるが、ボディ僧侶は彼らのコミュニティとの交流を通して、着実に仏教徒運動を推進している。ミクロの活動がマクロと連動する萌芽がここにある。しかし、この構造解明は容易ではない。現代インド研究という大きな枠組みの中で、多くの困難を抱える下層民衆の全体像を描き出しつつ、かつ人々の抱える困難とそれを克服する試みが社会運動となって一定の動きを見せている仕組みと構造を捉えることができるのかという課題について、今後も挑戦し明らかにしていく。

4-3. 謝辞

最後に、本稿執筆の基になった一連の調査は龍谷大学アジア仏教文化研究センター（BARC : Research Center for Buddhist Cultures in Asia, Ryukoku University）の公募研究費により実施が可能になった。逐一お名前やご所属を挙げることはしないが、調査・研究において助言を下さり、激励してくださった先生方、そして惜しみない協力をしてくれたインド仏教徒およびアンベードカルを信奉する人々に、記してお礼を申し上げる。

以上

【参考文献】

- Zelliot, E., *From Untouchable to Dalit : Essays in the Ambedkar Movement*, Manohar Publishers & Distributors, New Delhi, 1998(1992).
- Enthoven, R. E., *The Tribes and Castes of Bombay Vol.II in 3 Volumes*, Low Price Publications, Delhi, 2008(1922).